

書くこと 指導のポイント

(その2)

～「まとまりのある英文」を書く活動の充実 ②～

【まとまりのある英文を書かせるために】

- 教科書を活用して、まとまりのある英文を書く時間を積極的に設定する。
 - ・授業で「まとまりのある英文」を作成させ、定着確認シートでも取り組ませ、定期テストでも出題するなど工夫する。
- 一問一答でなく、ワンセンテンスを付け加えることを日常的に意識させる。
 - ・「話す活動」や「書く活動」において意識させる。

「まとまりのある英文」を書く力を育成するために、上記の点について実践していますが、なかなか書くことができるようになりません…。



すぐには結果が出ないものです。でも、「まとまりのある英文」を書く機会を定期的に設定しているのはよいことです。次の段階は、「まとまりのある英文」を書かせる際の指導内容について検討することです。

生徒が「まとまりのある英文」を書くことを苦手とする原因の一つとして、「まとまりのある英文」を書く際、一度に多くのことを同時進行しなければならず、かなりの負荷がかかることが考えられます。主に次の3点が、「まとまりのある英文」を書く際に生徒が同時進行しなければならないことだと考えます。

「まとまりのある英文」を書く際に、生徒が同時進行しなければならない3点

- (1) 文章構成等を考えること (How “どう書くか”)
- (2) 書く内容を考えること (What “何を書くか”)
- (3) 文章を正しく書くこと (文法、語彙など)

+ 書く意欲

加えて、諸テストにおいて、「まとまりのある英文」については、正答率が低いだけでなく、白紙回答が多い点も課題となっています。基盤となる「書く意欲」を高める指導についても、意識して行う必要があると考えられます。

ただ単に、「自己紹介文を5文書きなさい。」と指示し、書かせるだけでは、ダメだったのですね…。



この3点+書く意欲 を意識して指導を工夫していくことが大切です。

今回は、基盤となる「書く意欲」を高める指導を継続しているK中学校の実践例を紹介しますので参考にしてください。

「書く意欲」を高める工夫

K 中学校の実践例

K 中学校では、「書く意欲」を高めるために、「まとまりのある英文」を書く際には、学習課題を工夫しています。本年度は、次の点に絞り共通認識・実践しています。

○「書く」必然性をもたせる工夫をする。

- ・相手意識をもたせる。
- ・書く目的を明確にする。
- ・生徒が書きたくなる学習課題にする。

書く目的等を日本語で示せばよいのですか？



K 中学校の次の例を見てみましょう。

中学2年生の実践で、生徒に“日本文化”について紹介するまとまりのある英文を書かせることを目的とした授業の導入です。



例)	・ALT のトーク	「日本（会津）に来て、温泉に入り、驚いた。」という内容を含むある日の体験を話す。
	・ALT からのお願い	「もっと日本（会津）が知りたいので、日本文化をたくさん教えてほしい。」とお願いする。
	・課題提示 〇〇先生に、日本文化を紹介しよう。	

課題提示の前に、ALT の話を【聞く活動】を設定したことで、「日本文化を紹介する」相手と目的が明確になっています。生徒が書く必然性を強く感じ、より積極的に書く活動に取り組めそうです。



「書く」活動につながる活動を設定し、書く必然性が自然に生まれるよう工夫することがポイントです。この場合は、「聞く」活動を設定していましたが、「話す」活動を設定することも考えられます。各校でもK中学校の例を参考に、工夫してほしいと思います。なお、本HPで、「英語科における学習課題」について解説していますので、そちらも参考にしてください。

また、課題に必然性をもたせることで、全てが解決するわけではありません。生徒が自力で完成することで、さらに意欲が高まります。

（その3）では、右の（1）文章構成等を考えさせる「手立て」について実践例を通し考えてみたいと思います。

「まとまりのある英文」を書く際に、生徒が同時進行しなければならない3点

- （1）文章構成等を考えること（**How** “どう書くか”）
- （2）書く内容を考えること（**What** “何を書くか”）
- （3）文章を正しく書くこと（文法、語彙など）

+ 書く意欲